

## 吉田先生からの最後の贈り物

禹 朋 子 Tomoko B. WOO

いつの頃までだったか、かつて京大教養部に「文学」という科目があった。当時は電算システムはおろか厳密な履修登録らしきものもなく、京大生のスタンダードな履修モデルは一回生の時点で教養課程の単位をほぼ取り尽くす、という乱暴なものだった。この伝統に従った文学部生が二回生になると、エアポケットに入り込む。突然与えられた自由を持て余し、やたらに語学の授業を取ったり、アルバイトに精を出したり、オケの練習に身を入れすぎて早くも卒業への道のりからドロップアウトしたり、あるいは極まれに、大研究に着手したりするのだが、私の場合、英語・フランス語・ドイツ語・ラテン語（当時は必修）の他に「一応文学部なんだから」というわけで、この「文学」の授業をとることにした。この講義はリレー式になっており、今思えばその年は、教養部、文学部、人文研のフランス関係の先生総出演というプログラムだった。

そろそろ暑くなりかけた初夏のある日、A号館一階のその教室に怪しげなお兄さんがあらわれた。太畝の白い半袖サマーセーターを素肌にまとい、手首には遠目にもそれとわかる金の太いチェーンブレスレット。私は男の人が丸襟のものを着ている姿が好きではない。いわんやアクセサリーをや。その日の授業の中身は全く記憶になく、覚えているのはそのお兄さん、すなわち吉田城先生の二回目の授業をさぼったこと。巡り巡って昨年私が一回生向け「フランス文法」の授業をしたのはこのときの教室ではないかと思う。今はクーラーがあるけれど、当時国立大学にそんな贅沢は許されなかった。暑かったのだと言い訳しておく。

だから、というべきか、私が分属にあたって仏文を希望したのは吉田先生につかんがためでは全くない。しかも私が三回生になったとき、先生はフランスで在外研究中だったはずで、初めてお話ししたのは三回生の後期になってからだったのではないだろうか。それから二十年、先生との思い出は語り尽くせないであろうし、ともすればきれぎれで、今はまだ言葉にならないことどもも多くてもどかしい。言葉にするには足らぬおぼろな記憶の蘇りは「心情の間歇」の作用に任せることとして、ここでは先生からの最後の贈り物のことを記したい。追悼文というカテゴリーにはあるまじきことかもしれないが、吉田先生のお好みに倣って楽しい読み物になれば、と思う。

2002年から翌年にかけて、日本のブルースチアン達は大忙しだった。原因は

二つ。まずブルーストのカイエ転写・出版計画がとうとう本格的に持ち上がったこと。第二には2003年秋に日本でブルーストの国際コロックが開催される運びになったことである。

カイエ出版計画というのは草稿研究をかじったことのあるブルースチアンなら誰でも一度は夢に見るけれども、きっと夢のままで終わるであろうと自分に言い聞かせる、そういう類のドリームプランだ。ファクシミリ版が出版されているヴァレリーやパスカルなどに較べ、書き込みの複雑なフロベールやブルーストの草稿類は、ファクシミリ版を含め、そもそも出版に向かないとすら言われる。印刷技術上の問題もあるが、原稿を読解、転記した場合、文字のサイズや配列、削除・加筆状態の詳細といった原本の含む様々な情報は多かれ少なかれ失われてしまうからである。

現実的な問題として、出版社との権利関係というものもある。『失われた時を求めて』本文の著作権は切れているが、前テキストについてはそうはいかない複雑な事情があるらしい。吉田先生も参加されたプレイヤッド新版には「エスキス」として前テキストが読みやすくした形でふんだんにとりいれられているけれども、ガリマール以外の出版社から出された刊本では草稿類からの引用は三行までに制限されている。というわけで、2002年当時、ブルースト関連の草稿を読む最も手取り早くて確実な方法というのが、なんとパリの国立図書館旧館に行くこと。そしてその二階の手稿室でマイクロフィルムを読むことなのであった。マイクロフィルムリーダーの数は限られているので早い者勝ちである。出遅れると廊下に置かれたテーブルに座って、席が空くのを待つしかない。

吉田先生がフランスで博士論文を書かれた1980年代半ばまでは草稿帳や校正刷りの現物を閲覧することができたそうだが、資料の傷みが激しいため現在はマイクロフィルムのみが閲覧可能になっている。先生のお話によると、僕なんかは大事な資料だから丁寧に読むんだけどサ、隣で読んでるアメリカ人なんか、ものすごいスピードでページめくってるんだよ。大丈夫かなあって思ったら、案の定パプロールがはがれちゃって、あわてて係の人を呼んだんだけど、どこに貼ってあったのか判なくなっちゃったんだよ。というわけでマイクロ化も致し方ないとは言いながら、紙や筆記具の質を調査したり、現物のスケールを正確に把握したり、複数の資料を並べて比較検討したりといった作業が困難になったことを嘆いておられた。たとえば、ブルーストはカイエ、あるいは別紙に書き付けた文章を切り取って別のノートや校正刷りに貼り付けることがあった（これが上述の「パプロール」）。この種の移動は執筆時期の特定においても

重要な意味を持つが、現物の閲覧ができなければ最終的な確認はそれだけ困難になる。また現物の場合数冊同時に閲覧できたそうだが、マイクロフィルムは原則一人につき一度に一本しか閲覧できないことになっている。マイクロ化されたのであれば、その複製はかえって容易になったのではないかと考えるのが普通であると思うが、この資料についてはBNの許可を得るのが難しく、複写は一資料の20%までと制限されていた。

このような次第で草稿のファクシミリ版や転写 (transcription diplomatique) の出版というのは、まさにドリームプランである訳なのだが、この種の計画は、それまでも持ち上がっては頓挫していたようだ。だからこの話を聞いたベテラン研究者たちの心には「またか」という不安と「今度こそ」という期待が入り交じっていたに違いない。ところが今回はどうやらフランス側も本気らしいと多くの人が思い始めたのは、春の学会に合わせて来日したアントワヌ・コンパニオン氏 (当時パリ第4大学) とナタリー・モーリヤック氏 (CNRS) がこの計画の説明会を開いた折りのことであつたと思う。獨協大の一室で行われた打ち合わせの会合では、計画の概要説明のほか、75冊の草稿帳の暫定的な担当決めがあつた。

進行の都合上、教壇にコンパニオン、モーリヤックの両氏が並んで座り、日本側の参加者は、世話役の吉川一義先生 (当時都立大) や吉田先生も含めて「コ」の字型に並べた学生机に座る格好となつた。二人の説明に対して熱心に質問される吉田先生は、まるで講義中、徹底的に疑問を解こうとする学生のようなだつた。大学の講義や演習はもちろん各種学会や講演会の席でも、吉田先生はあくまで「先生役」を果たしておられたし、周囲の人々もそれを期待していた。けれどもこのときは、その役を降りて一人の研究者として振る舞っておられたと思う。実はそういうときの吉田先生はとても冷たい人に見えて、こちらは不安にさせられる。それはとりもなおさず普段、先生がいかにその場の雰囲気を保ち、会合を円滑に進め、参加者が満足して帰ることに心を砕いておられるかの裏返しに他ならないし、こちらが緊張を感じるとすればそれは、自分が果たして一人前の研究者として吉田先生と「机を並べ」るにふさわしいかが問われているからである。

この計画について先生は、いやあ、今度だってどうなるかわかんないよ、と繰り返し仰りつつも、同時にこれに期待をかけておられたことを示す挿話をふたつ紹介したい。

大阪外大で開催された2003年の学会秋季大会で、なんと吉田先生の発表があつた。ジュネーブにあるボドメル博物館に、失われたと思われていた資料が所

蔵されていることを発見されたのである。発表後、CNRSの人にこの資料の話をしたら、みんな全然知らなかったよ、と自慢されていた。もちろん私だって知らなかったのだけれども、野暮を好まない先生の前では、ただ黙ってうなずくのが正解である。また、研究者の顔をしているときの先生は、ご自分の研究の裏を明かすようなことはされないが、このときは調査時の話をされ、楽しいけれども体がついていけないという意味のことを仰った。吉田先生の業績は多岐にわたるが、やはり最も得意とされていたのは草稿研究だったのではなからうか、と個人的には思っている。体力的に大変な思いをしてもフランスからスイスまで出かけられたのは、それが草稿に関する仕事だったからであり、物質的な条件とご病気に阻まれて草稿研究が思う存分できないことを誰よりも齒がゆく思われていたのは先生だったのではないか。

その後ほどなくしてBNから許可が下り、ブルースト関連マイクロ資料の大部分を購入する、というお話があった。CNRSを中心とする出版計画にはBNも無関係ではないらしく、この時期に都立大の吉川先生、阪大の和田章男先生も複製一式を購入することに成功されている。それでも入手は一筋縄ではいかなかったことを冗談めかして話された。BNに一生懸命手紙書いてサ、やっと説得したと思ったら、研究費で買うのに立替払いなんだよ。いくらすると思う？ こういうときの吉田先生の決まり文句は「いやあ、定期預金を崩すばかりだよ」で、このときもそうって話を締めくくられた。途中、BNに行列して読むなんてばかばかしいよと仰ったのは、その前年、猛暑のバリで大変な目にあったことを縷々訴えた私や他のブルースチアンへのご配慮だったと思いたい。

2004年1月、届いたマイクロの整理に伺った。早く図書室に配架してもらうには、煩雑な整理を済ませてから整理掛に渡すのがコツらしい。行ってみると、ミカン箱くらいのダンボール箱に裸のマイクロフィルムがガサッと入っていた。これがBN参りをして読んでいたものかと思うと心境は複雑である。これを一本ずつ、かねて用意の紙箱に収めてラベルを貼るのだが、これは院生の小黒君が用意してくれていた。私はシールをはがして貼るという単純作業をし、院生のちょっとした質問に答えて先輩面をし、会議から戻られた吉田先生に作業終了を報告して感謝されるという最高の役柄だった。先生はフィルムを一本取り出して陽に透かし、ねえ禹さん、これってこうやってなんとか家で読めないかなあ、駄目かなあ、と結構真剣に仰った。それがあまりにおかしかったので、後日、人文研（当時）の森本君にその話をしたところ、お家にマイクロリーダーを置けばいいではないかと言われてしまったけれど。

その後、出版計画はモーリヤック氏、吉川一義先生を含む5名の編者を中心

に進行中である。現在の最新情報では、まずは一橋大の中野知律氏、モーリヤック氏、そしてフランシーヌ・ゲージョン氏が担当したカイエ54が出版される見込みとなり、2006年3月にはパリでカイエ出版を巡るシンポジウムが開催される運びになっている。

さて、この時期にブルースチアンを忙しくさせたもう一つの原因は2003年9月に開催された国際コロック「国境なきブルースト」であった。このシンポジウムは吉田先生、吉川一義先生、そしてその夏3カ月間、客員として京大に招かれていたパリ第3大学のビエール＝エドモン・ロベール氏がコーディネータとなり、関西日仏学館・都立大の共催を得て京大の主催で開催された。京大と都立大を会場に、合計3日にわたって行われた23の研究発表の内容については、前年に日本で行われたコンパニオン氏らによる一連のブルースト関係の発表と併せ、ミナール社から論文集が刊行される予定である。ゆえにここではその時の周延的な雰囲気をお伝えすることにしたいと思う。

9月半ばとはいえ、京都はむし暑かった。開催の前日、到着したゲストを迎えての夕食会に吉田先生は透析のため欠席された。このコロックの事務方を任されていた院生の小黑君は緊張の面持ちだったが、幸い吉川先生や明治学院の湯沢英彦氏、金沢美大の青柳りさ氏らが来られ、日本に到着したばかりの外国からのゲストと滞りなく夕食会を済ませることができた。

初日にはベテラン陣の発表が組んであり、全てが予定調和的に進行して終了し、夕刻から関西日仏学館で音楽会とレセプションが行われた。レセプションは、それまで経験したいくつかのものに較べても盛会だった。参加者の数だけでなく、料理も素晴らしかった。私は翌朝一番の発表だったので気もそぞろだったのだが、しかしその順序のおかげで鈴木道彦先生とお話する機会に恵まれた。明日はどんな話なの、と尋ねて下さったので簡単にご説明すると、ふむふむとうなずいて下さった。問題の二日目、中野知律さん、青山学院の和田恵理さん、名古屋大の加藤靖恵さん、慶応の真屋和子さんなど日本側女性陣のほとんどは、なぜか（いやきっとだからこそ）この日に発表することになっていた。皆普段はおしゃべりなのに、この日ばかりは朝から寡黙で、全員の発表が終わった時には大きな解放感を味わった。

その夜は川端二条の「がんこ」で夕食会が催された。ブライアン・ロジャース氏とアニック・ブイヤゲ氏は日本食がお得意ではなく、一卓だけしゃぶしゃぶが用意された。事前に、ねえ禹さん、そこのテーブルについてくれる？ 僕も行くからさ、と吉田先生に言われ、ええもちろん、とお答えしておいたのだがそうは問屋がおろさない。京大からタクシーに分乗した際、私は問題のお二人、

そしてピエール＝ルイ・レイ氏とご一緒した。通り道だから京大会館に寄って書類鞆をおろしてこられますかと尋ねると、それはいい、と仰る。かくして運転手さんに心配されつつ待つこと何分くらいだったろう。お店に着くと、私たちの遅いことを心配した東北大学の阿部先生が玄関まで迎えに出ておられた。やあ、禹さんと一緒だから大丈夫だよ、って吉田さんは言うんだけどね、と仰りつつ急いで私たちを案内して下さった大広間にはあくまで横に長く卓が並べられていた。しゃぶしゃぶの用意ははずこと眺めるに、同じ部屋でありながら離れ小島になっている。当然吉田先生はお座敷の中央あたりで皆に捕まっておられ、私の相棒は院生の津森君ということになった。ロジャース氏とブイヤゲ氏は本当に食が細い。晩ご飯にサンドイッチを食べられる店はないかと仰るくらいだ。私たちはもういいからどうぞ召し上がれ、と言われて困った私は、スイス留学直前とも知らず、下宿生なんだからこういうときに一杯食べておきなさい、と津森氏のお皿にどんどんお肉を放り込んでしまった。

外国からのゲストのアテンドに関して吉田先生ほど細かい指示を出す方を私は知らない。途中、私たちの卓に来られて翌日の予定の説明があった。午前中は金閣寺と竜安寺、これは「ミユスト」(たぶん英語の must のことと理解)。お昼は芝蘭会館で食事。僕やロベールさんも行くからね。午後は買い物と二条城だよ。実はロジャース・ブイヤゲベアは『ブルースト事典』の校正作業に忙しく、観光はパスの意向だったのだが吉田先生の熱心さに負けて翌日の午前中は参加された。この日、昼に芝蘭会館へ戻ったのは、透析で観光はできないから、せめてお昼だけでも、ということだったと思う。

午後はレイ氏の希望でまずデジカメを求めに行ったが、充電式を面倒と思われたようで、結局フィルム式のカメラを買われた。僕は買い物にうるさくないから、と仰るとおりの即決で、とても楽だった。ただ明らかに疲れておられ、雨も降るし、もう帰ろうかというムードに激しく抵抗したのがCNRSのベルナール・ブラン氏だった。加藤靖恵さんも乗り気だし、レイさん一人を帰すわけにもいかず、皆でタクシーに乗り込む。ブラン氏は予習してきたらしく、二の丸御殿を見学中、ここでレストラションが行われたのである、などと我々に解説してくれる。ところが一周したところで「この建物は何だったの」と仰る。二の丸ですよ、とフランス語で説明すると、では「ホンマル(ここは日本語)」があるはずだ、そこへ行こうと仰る。本丸は通常非公開だが、このときは築城四百年記念で開いていた。ああ。

2004年3月、吉田先生はパリへ出張された。青柳りささんが提出された博士論文の審査員のほか、いくつかの講演をこなされた。このときロベール先生が、

バリに滞在していた京大の学生やブルースチアンを自宅に招いて下さった。後に知ったことであるが、この出張の際、吉田先生はロベール先生に対し、これが最後のバリ訪問だと仰ったそうである。

同年7月、カイエ出版計画推進のため、前述のモリヤック、グージョン両氏が来日され、カイエ54について中野さんと詳細に検討された他、東京と京都でいくつかの会合が持たれた。最終の京大での講演会では吉田先生ご自身も発表されるので私が司会を仰せつかった。その後の夕食会で先生はいつものように冗談を飛ばして周囲を笑わせておられた、と見えたがそれは間違いだった。帰り際、ひどく弱々しい口調で「明日はちゃんとしてるのかな」と仰ったのだ。ゲストの観光スケジュールのことである。虚をつかれた思いがし、あわてて小黒君と私が翌日の担当であることをお伝えした。

その年の12月、恒例の関西ブルースト研究会と忘年会が行われた。発表者だからということで真屋和子さんともども中央に座るよう指示された私は少し席が離れてしまったが、会の途中、ご自分のお体についてこれまで聞いたことのない気弱なことを仰るのにぎくりとして、しばし顔を注視したものだ。構内のレストラン「ラ・トゥール」を出たところで和田恵理さん、加藤靖恵さんの手を両手で握り、しきりに「じゃあね、じゃあね、元気でね」と仰った。何かがおかしかった。何があったのですか、と尋ねようかどうか迷いながらその光景を眺めていると、先生の方がそれに気づかれて私にも同じことを仰り、その場はそれきりになった。そして私を含め、その場にいた多くの人々にとって、それが本当のそれきりになってしまったのだ。

吉田先生の贈り物とは何なのかといえ、それはブルーストを研究する人々を直接結びつけてくださったことに他ならない。もちろんそれまでもブルースト研究会という組織があり、様々な催し物を通して活発な交流と研究活動が行われていた。しかし私個人について言えば、吉田先生を介してどなたかと接触しているという感覚からなかなか自由になることができないでいた。直接相談し、アドバイスをいただき、刺激を受け、時には競争し、また成果を報告できる沢山の仲間ができたと思えたのは、このカイエ出版計画と2003年のコロクを通じてである。

吉田先生がご自分の代わりに沢山の方々を私の周囲に残して下さいののだと思えてならない。

(う・ともこ 帝塚山学院大学助教授)